

ラインスの歌うた

雨 峰 生

五つとせいつか過ぎざりて

いつたびながき冬と夏

ゆきてかへらずなりたれど

深山みやまがくれの谷間たにまより

湧わき來くる清きよき水みづの音ね

今いままたさくぞうれしけれ

ひとたびならず二度ふたどまでも

人里ひとさと遠とほくはなれたる

寂さびびて思おもひもすみわたる

いともけわしき崖がけの下した

しづけき空そらの姿すがたをも

うちまじえたる景色けしきをば

われはうれしくながめけり

さても楓かへでのこのあたり

樹陰こかげにかつてやすらひし

時節ときもふたゝびめぐりきぬ」

人家じしかのわれにし其そのあとは

四期よきをりくゝにかれさかえ

花樹林はなじゆりんいまはおひしげり

なけば果この實みも熟じゆくしつゝ

縁みどりいろなる衣ころもをば

まとひかざせる其その状さまは

よしや人ひとにはしられず

此このくさむらに埋うもるとも

寂さびしさをまざる森影もりかげの

景色けしきをたえてそこなはで

のこりしかげぞうれしけれ」

ひと度ひとたびならず二度ふたどまでも

われはそれなる生垣を

(名は生垣とかなはねど)

無下にまとへるうねり木の

列べるさまを見たりけり

あはれ牧場のうれしさよ

縁りとぼそにのぞみつゝ

輪形ながらにのぼりゆく

煙りは静か木の間より

それとさだかにわかねども

人家すくなき森のうち

世をばつらしとのがれたる

隠者の獨りすまゐりして

楳火をもやす住家そも

あるは定めるやどもなく

かり蔭をよそに侘びめぐる

雅び男風情のわざにやと

覺束なくもおもほえて

幽かに目には見えにけり」

かゝるうれしきをもかげは

身やよしそこにあらぬとも

めしひのなかむそれならず

いともさびしき庵にすみ

わるは塵だつ巷にか

寺のすみにとすむとも

目にうつろへる景色には

少時の間をもかざされぬ」

疲勞にせまりし吾が身をば

吾れとも知らですぐす日も

胸にやどれるすがたには

血管にとほり心に入り

深く心の奥がきに

ひそめる潔き緒琴にも

ふれたつたづよき力もて

なべてつかれをよみがへす」

物我のけじめわするまで

たのしき感にうたれつゝ

あはれやさしさこの感動

いみじき愛のこのうごき

思ひみるさえなかくに

名づくるすべもなかりける

このいさゝかのはたらきは

思へばこれぞ人生に

やがて尊とき助けとは

なりてゆくらむこの感」

またわれさらに思ふなり

けだかき姿よそほひし

天はめぐみのたまものを

賜ひくだせしものなれば

そは不思議なる世の中に

神秘をこめてあるなれば

分き入りがたきものなれど

幸あるれのが心もて

進みてゆかばいかばかり

たのしさまさるとならん」

かゝるしづけき幸はある

心をもたば愛情は

身體をかよふいきのねも

血くだをつたうはたらきも

深き洗みにうちしほれ

眠のうちに身をなぐる

つらさがなかにあるとでも

活ける精神を呼び起し

諧和の力よるこびの

つよき力に眼も光りて

物にやどれる生命も

つき射るまでに蘇へる」

若しやこれらの信念をば

わだなることと思はするか

さはなしさなくしては

いかに小関く齟もる、

境のうちにうちなげき

激しさをしげきなかにたち

つらさうれひにとさされつ

世のさが多きあらなみの

心のを琴にかゝるとさ

いかにしばし精神にて

「おは、ワイ川の澤なる

森の守りの女神よと

汝に向ひて呼ばふべき

森のあなたを彷徨へる

汝をばわれの精神にて

向ひ廻さであるべきか」

とは云ふものゝわがむねの

憶えの力おぼろげに

今はかすかになりはて、

想にあまる片影は

つもるうれひにさえられて

半ばさえゆく心地すも

たいかくこゝにたてるまに

むねにささみしえずがたを

再びこゝにかへし見む

なれどたいかくたてるまも

われは刹那のよろこびと

思ふをなし此の間にも

未來つきせぬ永劫も

此の生命とむくろとは

かくもこゝにとながらへて

ありけるものと思ふなり」

さはれわが身のたしなみに

昔しはこゝの小山こえ

峰ふみわけてさ男鹿の

深き山邊の水さびみ

さびし流れによりそひて

心のまゝにかけめぐる

風情はやがてにたりしに

今は昔に愛したる

物と思ひし心もて

恐るゝものと思ひなす

世の人々の心にと

殊なく變るわが身かな

なれど自然に向ふたび

自然はいつもわれにあり

(わらべの折りの粗朴なる

小鹿ににたるふるまゐに

うちよろこびしさまなくも)

よしわれありしいにしへを

かくにしぬびすなりたれど

響きたえせぬ瀑つせは

脈うつごとくかゝりきつ

山にかゝれるたかき巖

深くしげれる森の影

造化に對ふ愛と慾

感じはつねにわれにあり

わがうつくしと感じ入る

思ひのといく其の極み

けじめをたえず智慧とても

物見る眼からずとも

おはれされどもかゝる日は

すぎてむかしの夢のあと

こらへかねたる歡喜も

眼くるめさし悦情も

今はきたらずなりにけり

されど今猶は造化婆は

憂きやつらさに此の身をば

そぎたまはぬぞうれしけれ

われかくうけしいにしへの

愛の力の賜を

今うすとてもつぐのひに

澤なる恵たまものを

享けえたりとは信ずなり

幼き時の考がへる

力のあらぬ時ならで

われは造化を觀ると云ふ

思ひに今はすゝみけり

世の人々の沈みたる

つらさ心のこねをば

幾たびわれはさくとも

かの信念の大ひなる

力にいつかほだされて

心ゆたかになぐさめつ

胸の激しき荒なみも

たえて風ぎけりわが心

たゞにそのみならずして

たかき思のよろこびに

撲たるゝまでにうごかされ

深く幽かに何事も

けだかき美念に注がるれ

かくと感ぜしその底は

かゝやきわたる夕榮や

地球をめぐる大洋も

活きくしたる大氣をも

緑一碧の大空も

人の奥にとひめてふ

活ける精靈の力をも

物考ふるはたらきも

物我の上にくきわたる

すべて思想の基にまで

隈なくこゝにかゝるなり」

さればわれらが幾歳も

牧場や森や山々を

わくとぞなくめづるなれ

この緑りなる地の面より

わが目の前に見ゆるなる

なべてのものにわくがれて

さときわが眼とさとき耳

みつきゝつする大ひなる

世界のものはやがてみな

われらを遠く覺り看る

半ば造化の身をやとし」

かくて造化のふところ

認められたる喜びの

感一線の聲ねこそ

わかきようなる思考への

水なれ棹とも乳母とも

心導く人なるか

善きに誘ひてわやまらぬ

守護神とこそ見ゆるなれ」

若しやわが身がかくまでに

汝れに誘はれてなかりせば

わが爽かなる精霊も

哀しき淵に沈みはて

浮ぶ瀬なくて終りけむ

されど汝はうつくしき

この川の邊にたゞづみて

吾れと一つに存在へて

ありしゆゑにと思ふかな」

わはれ汝は吾にとり

いとしさたえぬ友なるよ

あゝいとしいあゝいとしい

いとしさまさるわが友よ

汝れの響きを今さくも

われは昔しの胸のうち

ひめおきたりし其の聲と

心にいたく思ふなり

なれの涼しき眼より

射りさす光りそのうちに

昔しながらのよるこびを

したしく胸によみゆきて」

わゝ、われしばしなりとても

昔しありにしわが影を



汝の姿のそのうちに

見まほしゝとも思ふかな」

こひし戀しの我妹子よ

造化はたえていたづらに

愛づる心をあざむかぬ

汝と深くも覺るかな

此れぞわがなす誓かも」

わが一生の年つきを

喜悅に出でゝ喜悅にと

誘ひてくるゝなれの徳

仰ぎ見るこそ尊けれ」

さすが造化はわが心を

勵ますのみか柔和なる

麗はしさもて動かしつ

高さ思を養ひつ

悪魔の舌にかゝりては

浮きし決定をなさしめず

我慾の人もさげすまず

輕薄ものゝ群へとは

慈けをそこにかけしめず

げにながつよき力には

その日其日の生活の

うらさびれたる「交際」も

摧くをうるかさてもまた

神にまかせし信心の

幸いと多き賜ものゝ

それにはみちてありと見ゆ

其の心をばたぞありて

摧きたむころものありや」

されば月影おのづから

ひとりわゆみてそのうちに

さきくさやかにてりてわれ

狭霧こめたる山のはに

ふき渡りゆく風もまた

この河沿をすぎてふけ」

やがて年月たちもせば

あからさまなる狂喜すら

謹嚴まざる悦情と

熟りゆくらむ汝か心

汝か心もかくてまた

愛でたきものゝ宿りとも

なりゆくとのありもせば

なれが記憶の底のうち

奇しき聲わねや色どりの

すみかところをはなるならん」

わはれそれとも汝ひとり

かなしくつらく恐ろしき

痛ましさとにいだかれて

やるせなきとありもせば

をとなしやかの喜の

思をいかにみつとも

いやす思をとめをきて

わが誠戒しそをもちて

思ひかへせよわがを」

たとひわが身はそのそばに

あらずなりゆきなが聲は

きゝえずなるも汝れが身の

あからさまなる眼ざしに

過ぎし世ぶりの係を

捉ふるすべもたえはてば

汝なれはかならずこの川かはの

うれしさまさる水みづきわに

わすれやすらむ吾わがことを

われと汝なれとの兩人ふたりして

たちしむかしの姿すがたをば」

かくよし汝なれはなるとても

われひとりにて造化つくり婆ばの

歸依きえ者しやとなりて未すべながく

仕つかへまつらむそのために

つかれせぬみとかへりみつ」

いなわれむしろかく告つげん

はぢらひ顔かほにうすべにを

させし乙女おとめの戀こひごゝろ

それにもませし眞直まことなる

はるかに遠とほざ且かつつ深ふかき

熱まき心こころをはこばして

戀こひしく訪とふてたづねこん」

かくせばなれも忘わするまじ

年とし月つきながくとつくに、

跡あとさだまらぬ客きやくとなり

露ろ宿しゆく風ふう婆ぽうたえまなく

よそにわが身みを置おくとても」

かくせば縁ゆかりりしたゝる、

牧場まきばの景色けしきわがための

唯ただひとつより外ほかになき

いとしきものとなるのみか

汝なれがのぞみのあてども

はた造化つくり婆ばの身みとなるも

こよなき幸まことはなかるらめ」

(Jury 13, 1798) (大尾)